

## 「省」という字

太平洋戦争も末期に近づいた頃のことであった。或る日安岡正篤先生が大蔵省にお見えになつて一場の講演を試みられた。そのお話の内容は今となつては忘れてしまつてゐるが、何でも大蔵省の省という字には「省みる」という意味と「省く」という意味と二つの意味があるといふことを言われ、特に「省く」という意味がわれわれにとって大切なのだといふことを強調されたことだけは、不思議にも私の心に刻みこまれてゐる。

論語の学而第一の編に、「曾子曰吾日三省吾身為人計而不忠乎与朋友交而不信乎伝不習乎」とある。簡野道明先生の直解には「曾子曰ふ、吾は平生日己の身を再三反復して省察検討する所あり、それは他人の爲めに謀慮することは、兎角疎略に流れ勝ちのものなるが、吾は果して人より相談を受けし事に対して、不親切にして真心の十分に尽さざる所はなかりしかと。又朋友と交りて、言語の間に誠信ならざりしことはなかりしかと。又師より学びたる事の未だ習

熟せざるに、之を他人に伝授せしことはなかりしかと。かく反省して若し少しにても忠信の道に欠くる所あらば、速かに之を改め無ければ更に奮勵して、道に進まんことを心掛くるなり。」とある。

これは何も役人たる人間に対するお諭しではなく人間一般に対する教えであるが、役人にとっては特に大切な注言ではなからうか。商人であればその商況の繁栄を招くためには、利害得失の上からも自分のやり口を絶えず反省しなければならぬわけである。ところが役人というのはたとえ横柄に構えていても、過ちさえなければそれがために月給が下がるわけでもない。換言すれば直接自分が痛い目に遭うわけではない。又その結果が会社の考課状のように数字の上にはつきりと表われてくることもない。だからといって役人に反省が必要でないというわけのものではなからう。

元来役人というのは、今井一男氏の定義によれば「権力に値する実力なくして、その権力をいただくようになった者」というわけだが、そうしてみると役人は一般の人よりも自分の言動についてもっと深い反省が要るものである。ましてその言動の及ぶ射程と効果が、役人が想像する以上に広く且つ深いものがあることにおいておやである。

役人に責任がないというのであれば、これほどいい商売はない。「すまじきものは宮仕え」と言われているが、これは月給が少いから役人はつまらない等という意味ではなく、むしろ根本において役人の責任の厳肅さを歎じたものである。そして役人の深い反省に根底を發する厳肅なる責任感がないところに、財政の確立はないのである。財政の確立は単に理財の巧拙からでき上るものでは決してないのである。

近頃、役人とか議員とかいう種類の間は、雑務に追われて本当に反省の余裕に乏しい。由々しいことである。恐ろしいことである。

ところが、もう一つの「省く」という心術が役人に根本的に大切であることをつくづく考えさせられる。同じ安岡正篤先生も「試みに論語開卷第一の四章目を持たして、曾子曰吾日三省吾身を読ませると、必ず吾れ日に三たび吾が身をかえりみると読んで、それ以上をあまり考えない。然し「省」の字は「かえりみる」と同時に「はぶく」である。「この省くことが「省みる」と同時に大切であつて、道義も政治も結果は省かねばならぬ。人間は自然の理で、いつのまにか煩惱になるから、それをかえりみて雑念、雑想、雑事をはぶいてゆくのが道義である。政治も又然り。簡易清論が要旨である。御無事であつてめでたいのである。故に官庁を××省と言つてはないか。

現代の一病弊は煩冗ということである。あまりに事が煩わしすぎ、刺戟が多すぎる。欲が多すぎる。心が乱れすぎる。故に現代人ほど「忙人」はない。この忙は畢竟何になるか。省みれば茫茫漠々として真に愚昧である。有権の力は三省より湧く。我々はできるだけ心頭を省し、身辺雑事を省き、綽々たる余裕を以て如何なる事変にも毅然として処してゆけるだけの心身を造つて置かねばならぬ」と言われている（危機静話より）。

私は更にこの「はぶく」という心の手術が財政の刷新にとって何よりも大切であると思う。われわれの毎日の嘗みは、何と雑想と雑念と雑事の波に追われ圧倒されていることであろう。陳情と文書の氾濫、請願と献策の堆積、視察と調査の繁員、冗員と空疎な議論の過多、これが目の当たりにみる政治の横顔である。これでは疲れてしまう。疲れる許りか大変な冗費を費すことになるわけである。又余り豊かな政治の結実を見ることができなくなるのである。蒙古の名相が「百利を興すよりも一害を除くに如かず」と喝破したのは有名な話であるが、今日の本の現実に照して、この一語ほど心を射るものはない。

## 旧人の味

ちかごろ私は現代日本の教育というものの成果について、大きい疑問を持つようになった。大学を出たけれど、その大学は一体われわれに何をもたらしたかということを反省してみると、正に慄然たるものがある。大学を卒えたわが身をふり返ってみて実に察漠たるものがあるのは一体どうしたことだろう。頭の中には、西洋に起源をもつ知識の断片が雑然と入り交つて、あぐらをかいているに過ぎない。その断片には統一がなく、それから遅しい実践力が出てくるようにはどうしても思えない。なるほど自然科学や社会科学の領域においては、多少の技術は身につけているかのようなものはある。そしてその多くは客観論、運命論が多い。それはわれわれの人格を向上させ、品性を陶冶し、実践に活力を与えるようなものではない。むしろそれを阻むようになりかねないものである。ところが私は、今壯年を超え老境に入った日本人の中に、玉のような立派な人格を見出す場合が多い。これは風雪の経験を重ね、幾星霜にわたる辛酸を経

るに従つて、年と共に醸成されてきたものだけ受取るわけにはまいらないものがある。それは、どうも経済的素養としつけを身につけているかないかの、相異のように思われてならない。

私の妻の父は或る会社を経営している実業人である。正則英語学校に在学中、商売の方に興味を覚えて退学したというのに、漢文を読ませれば私などはとても足許にも及ばない。歴史にも詳しい。年は六十八歳であるが朝は八時にはもうちゃんと出勤する。それも毎月都電のバスを買つて、屋敷のすぐ下の停留所から電車の吊革にぶらさがつて出勤するのである。尤も近頃眼がうすくなつたので、私共がやかましく言つて、やっと往復だけをハイヤーにしてもらつた。四時頃になると、時計の針のように正確に帰宅する。絃歌紅燈の巷に出入することは一切ない。唯同業者の方々の懇親会に年に一度か二度出席する位が関の山である。日曜には一日古典に親しんだり俳句をひねつたりして暮す。旅行は好きであるが、大抵の場合、深山幽谷を辿つて詩心の湧くのを待つて句作をする。螢の頃には螢を求め、かじかの鳴く頃にはかじかの声を聴き、紅葉の頃は紅葉を尋ねるといふ具合に、方々を旅行して専ら自然に親しんでいる。小さい靴一つをもつた気軽な旅行であり、宿も決して贅沢をしない。身を持するのに厳正であり質素であ

る。人の言うことはそのまま信じて疑うことがない。彼の生活には虚飾とか無理というものが一切ない。虚偽と暗影がない。彼は物心両面にわたって独立しているから強い。正を踏んで離れないから毅然としている。高僧のようなその生活に、朝夕接触している私は、その澄み切った明鏡に自分の至らなさを映されて恥じ入ることが多い。

私の友人に横井広太郎君がいる。名古屋製糖の社長として多幸な将来を約束された青年実業家である。横井君は剛毅果斷、自らにして人に將たるの器量と資質に恵まれた人であるが、私はその横井君よりも一層その嚴父に惹かされている。名古屋に行く、短時間であるが、嚴父にお目にかかることを楽しみにしている。一見、田舎の百姓のような恰好をしている。昔ながら自分のうちで作ったシャツを着て、早朝から何かしきりに片付け仕事をしている。態度は謙遜そのものである。一言の冗言もないのに、温容の中には柔和なまなざしが光っている。この人がまた電車党である。電車のパスをポケットにしはせて、ことごとく用足しされている。友人のナゴヤジャーナル社長の水野勝太郎君が、私の妻の父と好一对だとして痛く感銘している。母堂が又大の信仰家で、四六時中、衆生の恩に感謝して生活されている。水野君は「あのお父さんと御母さんの精神が生きている限り横井君の事業は安泰だ」とよく言っている。

神崎製紙社長の加藤藤太郎氏は、私の同郷同学の先輩で、学生時代から今日まで特に御世話になっている方である。学生時代同学の県人会は、この加藤さん、東京海上の社長をされていた鈴木祥枝氏、台湾製糖の常務をされていて先年物故された玉井義助氏等を囲んで、時折開いたものである。加藤さんはいつもニコニコされて多くを語らなかつたが、ただ次のようなことを言われたことだけが私の記憶に残っている。「自分は有能ではない。況んや秀才でもない。唯王子製紙に入社した明治四十三年から今日まで、間違つたことをしないと云う当り前のことをやってきただけだ。自分は入社早々、北海道の苫小牧にやられた。当時、北海道に行くことは皆が嫌がったが、自分は我が儘を言わないで悦んで行つた。行つてみると実によい所で、東京に転勤を命ぜられた時は、もつと北海道にいたかつた位だよ」と。

寡黙であるが柔和な温容を以て静かに人に接し、常住坐臥身を持つること殿に、人に対して寛容である加藤さんの人格には、後進のわれわれは痛く打たれたものである。後年、大王子製紙の副社長になられてパーチと共に退社されたが、王子を廻る内外の人々から慈父の如く敬慕されたのも故なしとしない。三、四年前から神崎工場を再建されて、現在業界の明星のように隆々発展している神崎製紙は、何といつてもこの加藤さんの人格に負うものである。ところが

当の加藤さんは、「この会社もお蔭様で何もかも順調に行っているが、これは王子製紙から広瀬（専務）、遠藤（常務）の両君が、その多幸な将来を捨てて来てくれたことと、社員一同がよく我慢して一生懸命働いてくれた賜物だよ。」と言われて、自らのことは何も誇られない。

或る時、遠藤常務は私にこういうエピソードを話された。「社長の澁谷のお宅があまりに古ぼけてお粗末なので、かつて社員一同が拠金をしてお宅を改築して上げようという内意を洩したところ、加藤さんは、『お志は有難いが、自分は君達の収入が一銭でも多くなるように心懸けている積りだから、その君達からそうした心配をしてもらうという筋合はない。』といわれて謝絶されたことがあります。又自分は社長が古いフォードの車を使われているので、何度をもっとよい車に乗換えられるようにお勧めしたが、どうしても合ってくれない。そこで或る時、私は仕方なく非常手段に出ました。予め車を買っておいてそのまま自分は大阪に逃げて帰り、顔が見えない電話で社長にその旨報告して漸くその黙許を得たことがあります。わが社の内部には争議が一切なく、社員一同がよく働き、外部から信用を得て今日に至っているのも全く社長の人格の賜物です」と。全く美しい話である。

尚老来、公事に尽されている藤原銀次郎氏、私財を抛ち情熱を傾けて日本経済の欠陥是正と

南方開発に精進されている松永安左工門氏、早朝から仕事に打ちこまれその言動に乖離と虚飾のない磯野長蔵氏や杉山金太郎氏、行者のような精進を以て新生活の実践ときりつめた経営をやられている櫻田武氏、均衡経営の原理を勇氣と英断を以て貫いている古河電工の小泉幸久氏等、私の周囲には味のある旧人が多く、日夜垂示と指導をうけているのであるが、これは何としてみても有難いことである。

何事も人から出発し人に回歸してくるのが、人間社会の法則である。財政のことも決してその例外ではない。財政の計画やその運用も悉くが人間を離れてはならないわけである。自らのことを棚上げておいての財政の論議や献策が多いのは、近頃の流行であるようである。しつとりとアヴァンのよさを学びとつて反省してみる必要があると考えるのは、決して私一人ではないであらう。